

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書 (4年計画の3年度目)

1. 研究課題

(和文) ヨーロッパ現代思想と政治

(英文) European contemporary Philosophy and Politics

2. 研究代表者

(氏名) 市田良彦 神戸大学国際文化学研究所教授

3. 研究期間

2011年4月 から 2015年3月 まで (2015年3月まで一年の延長を承認済)

4. 研究目的 (400字程度)

日本では「現代思想」、アメリカではFrench Theoryと呼ばれたフランスを中心とするヨーロッパの現代哲学・思想を、1968年の世界的な学生叛乱、およびその後の左翼政治の変遷とつきあわせて歴史的かつ理論的に再検討すること。その際、特に①正統派マルクス主義の政治経済理論との批判的継承関係、②ラカン派精神分析と主体の理論の関係、③同時代の英米を中心に隆盛する規範的な政治哲学との関係を三つの軸とする。また、この「1968年の思想」につながる20世紀前半の政治・思想潮流との連関や、日本の政治・思想潮流との並行関係にも留意する。

5. 本年度の研究実施状況 (400字程度)

2013年度、公募研究班A班「ヨーロッパ現代思想と政治」では、9回の研究会で20の研究発表を連ねた(それぞれ2013年5/11, 7/2, 9/14-15, 12/14, 2014年2/1-2, 3/1-2)。班員の研究発表はすでに二巡目に入っており、2015年3月の共同研究班終了後の成果報告論文集に向けての最終段階に入りつつある。とりわけ、2013年度初めからは、本共同研究班と主体として、科学研究費基盤研究Bが獲得できたため、研究班全体をそれぞれ①マルクス主義との関わり、②精神分析との関わり、③(英米系)現代政治哲学との関わりを専門的に研究する3つのグループに分け、新たに沖公祐(香川大学経済学部准教授)や佐藤隆(大分大学経済学部准教授)、中山昭彦(学習院大学文学部教授)など経済学者・文学研究者の参加を募って研究会を続けている。9/14, 15の連続研究会は小泉義之の指揮する「政治思想」部門、7月2日の佐藤隆の発表および12月14日の研究会は長原豊の指揮する「マルクス主義」部門、3/1-2の連続研究会は立木康介の指揮する「精神分析」部門がそれぞれ主導して開催した。

6. 研究成果の概要 (400字程度)

年度始めに市田良彦班長が行った発表(5/11)では、1968年以降のヨーロッパ現代思想においては、マルクス主義の経済決定論に対する批判から政治の次元の自律性が再考されたこと、そしてこの文脈で政治的主体化が問題化されたことが強調された。この見取り図を踏まえつつ、もっぱらマルクス主義との関係ないしマルクスの再読から政治と経済の関係の問い直しを図ろうとしたのが、佐藤隆の「労働請求権」論(7/2)、沖公祐の「余剰」論、長原豊の「レ

ント」論である。一方、精神分析との関係においては、特にラカンは精神分析の症候論・現実界概念とイデオロギー論以降の政治的展開が注目を浴びた（3/1-2の立木康介によるラカンの症候論、信友建志によるジジエク論、上尾真道によるラカン- アルチュセールの比較論）。また佐藤嘉幸はガタリの精神分析論からのアプローチを試みた。また、政治哲学との関係については、佐藤淳二のアーレント論(9/15)、布施哲のシュトラウス論(9/14)など、現代英米政治哲学の古典における政治と哲学の関係を再考する研究発表がなされた。箱田徹のロザンヴァロン論(9/14)のように1968年以降の左派リベラルの社会民主主義論の批判的検討もなされた。ほかには、多賀健太郎のベンヤミン論(7/2)、田中祐理子のカンギレム論(2/2)など、いわゆる「1968年の思想」以前の西欧哲学に遡る研究発表や、『アンチ・オイディプス』の射程と限界を同時代の社会学化・心理学化の批判から論及した小泉義之のドゥルーズ＝ガタリ論(2/2)がある。また、2/1に開催された「ポスト68年の思想と政治」シンポジウムでは、長崎浩と桂秀実から戦後日本の政治と思想に関する歴史的論及がなされる一方、ギャビン・ウォーカーと廣瀬純は、マルクス主義的な歴史的・経済的条件に基づく政治的主体形成の理論の意義を今こそ再興すべきことを唱えた。

7. 共同研究会に関連した公表実績（出版、公開シンポジウム、学会分科会、電子媒体など）

今年度も班員からは多数の研究成果の書籍化が見られた。主なものに、廣瀬純『絶望論-革命的になることについて』（月曜社5月）、市田良彦・王寺賢太・小泉義之・長原豊『債務共和国の終焉』（河出書房2013年9月）、箱田徹『フーコーの闘争』（慶応大学出版会9月）、立木康介『露出せよ、と現代文明は言う』（河出書房11月）、廣瀬純『アントニオ・ネグリ 革命の哲学』（青土社12月）、市田良彦『存在論的政治』（航思社2014年2月）がある。また、本研究班員を主体として刊行された雑誌特集号には、長原豊責任編集の『情況別冊 思想・理論編第2号 現代政治経済（学）批判』（2013年7月）（長原、沖、佐藤隆、小泉、廣瀬が寄稿）、小泉義之責任編集『情況 2013年11・12月合併号 テクノロジー・テクノクラシー・デモクラシー』（『情況別冊 思想理論編第3号』）、小泉、田中祐、布施、長崎、廣瀬が寄稿）がある。また『現代思想 2013年7月号 ネグリ＋ハート』には、中村勝己・市田・王寺・廣瀬が、『思想 2013年12月号 デイドロ生誕300周年』には、王寺・佐藤淳が寄稿した。ほか、翻訳にスラヴォイ・ジジエク『2011 危うく夢見た一年』（長原豊訳、航思社、2013年5月）、ミシェル・フーコー『ユートピアの身体／ヘテロトピア』（佐藤嘉幸訳、水声社、6月）、ジャック・ランシエール『アルチュセールの教え』（市田監訳、伊吹・箱田・松本訳、航思社、7月）がある。

これら公刊物のほか、2月1日には「ポスト68年の政治と思想」と題し、研究班から市田良彦・長原豊（司会）、長崎浩・廣瀬純（講演者）が登壇し、桂秀実（近畿大学国際人文科学研究科教授）とギャビン・ウォーカー（カナダ・マギル大学古典学研究科助教）を招聘して国際シンポジウムを開催した（1月末の毎日新聞関西版一面に予告あり）。また、2012年に人文研に寄贈された、パリ5月革命についての資料を集める西川長夫・祐子文庫のうち、当時の写真・雑誌などは画像データ化し、2013年秋から研究班のHP上で公開している。

(<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~archives-mai68/>)

8. 本年度の共同利用・共同研究の参加状況

区 分	機関数	受入人数		延べ人数			
		外国人	大学院生	外国人	大学院生		
学内（法人内）	3	7	0	3	60	0	25
国立大学	7	7	0	0	63	0	0

公立大学	0	0	0	0	0	0	0
私立大学	6	6	0	0	54	0	0
大学共同利用機関法人	0	0	0	0	0	0	0
独立行政法人等公的研究機関	0	0	0	0	0	0	0
民間機関	0	0	0	0	0	0	0
外国機関	1	0	1	0	2	2	0
その他	-	130	1	30	130	1	30
計	17	150	2	33	309	3	55

研究参加者の所属機関数、参加人数、延べ人数を区分に応じて記入して下さい。

※「学内」の所属機関数は「学部数」等を記入して下さい。

※参加人数及び延べ人数の算出方法は、以下の例に基づき算出して下さい。

(例) ・1つの共同利用・共同研究課題で2人を共同研究員として3日間受け入れた(参加した場合) : 参加人数
2人、延べ人数6人

9. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

(参加研究者がファーストオーサーであるものを対象)

論文数	30	
うち国際学術誌に 掲載された論文数	(23)	(2)

※下段の()内には、拠点外の研究者による成果(内数)を記載。

(注) 分野の特性を踏まえて、参加研究者がファーストオーサーである場合の他に、コレスポンディングオーサーである場合や指導した大学院生がファーストオーサーになっている場合など、論文における重要な役割を果たした実績を示す必要がある場合は、その役割を明示の上で論文数を記載。

役割		
論文数		
うち国際学術誌に 掲載された論文数	()	()

※下段の()内には、拠点外の研究者による成果(内数)を記載。

※ 高いインパクトファクターを持つ雑誌等に掲載された場合、その雑誌名、掲載論文数、そのうち
主なものを以下に記載。

※ 拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す。

掲載雑誌名	掲載論文数	主なもの	
		論文名	発表者名

(注) インパクトファクターを用いることが適当ではない分野等の場合は、以下に適切な指標とその理由を記載上で、掲載雑誌名等を記載。

拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す。

インパクトファクター以外の指標とその理由		主なもの	
掲載雑誌名	掲載論文数	論文名	発表者名
『現代思想』	5	「怒りか、恥辱か マルクス主義政治哲学のために」2013/7, vol. 41-9, p. 210-240	<u>廣瀬純</u>
『情況』	12	「末人たちの共和国」、2013年11・12月合併号 p. 181- 201	<u>布施哲</u>
『思想』	2	「一般意志の彼方へ」、2013年12月号、p. 49-79	王寺賢太